

ツバキの語源

横山 健三

私は櫛物の名前の語源に興味があり、自分なりの愚説をもっている。私の住む越後では、雪解けを待っていたかのように、つぼみをふくらませるツバキについて書いてみた。ツバキの語源いろいろ

①ツヨバキ（強葉木）のヨの省略 ②アツバキ（厚葉木）のアの省略 ③ツバキ（光沢木）——ツバは光沢の意味 ④シュバキ、ジュバキ（寿葉木）の転訛 ⑤ツヤバキ（艶葉木）のヤの省略 ⑥テルバキ（光葉木）の省略転訛 ⑦ツブラキ（円木）の省略転訛 ⑧ツバキ（鐸木）の意味 ⑨朝鮮語ツンバク（冬柏）の転訛

このほかツバキはツマキとも呼んだという説や、ツバキのキは不要な添え字だという説などもある。

ツバキのキは木ではない

ところで、奈良時代およびそれ以前に用いられていた「万葉仮名の上代特殊仮名づかい」から推察すると、ツバキのキはどうも木ではないようなのだ。万葉仮名には甲類と乙類がある。これは母音のイ、エ、オがそれぞれ2種類に発音され、その違いによって、万葉仮名も甲類と乙類に書き分けられていたもので、ツバキは、古事記では都婆岐、万葉集では椿、海石榴、都婆伎、都婆吉などと表記されている。ここで使われている岐、伎、吉などは上代特殊仮名づかいの分類では甲類で、乙類の木とは発音が異なっている。

したがって△△木とする①～⑧の諸説はいずれも失格ということになる。それではツバキの語源は一体何なのだろうか。

ツバキの語源3説

① ツフ+アキ=壺+開きという説

私は古代の遺跡や墳墓などを見学するのが好きだ。しかも以前住んでいた新潟県東蒲原郡は古代遺跡の宝庫である。ある時、畑から壺のかけらが大量に出たのでもってきた。ボンドやセメントを使い、長い時間をかけて復元したことがある。

現在ツボというと、口の小さい容器のことを指すが、奈良時代やそれ以前には土の容器、土器を総称してツフ（ツブ）と呼んでいたのではないかと考えついた。古代の土器とツバキの開花の様子を比べると、なるほどよく似ている。植物の名称には、似ているものの名前をつける場合が多い。ツフ（ツブ）状の花が開く。つまり壺状の開花の様子をツフ+アキ（壺開き）と呼んだというわけだ。そして

古代には、母音の重複を嫌うのでツバキに転訛したのである。

② ツブ+アキ（粒、蕾+開き）という説

初秋のころ、庭のツバキを見ると、小さく、可愛らしいツボミをつけて来年の用意をしている。冬を越し、よい天気が続くと、ツボミはだんだんふくらんできて、春の日ざしを浴びると美しい花を開く。ツブ（粒、蕾）が開く。ツブがアキ、ツブがアキ、美しい花を開く。そしてツブアキがツバキ転訛した。この説がもっとも自然なように思われる。

③ ツブ+アキ（粒、円+開き）という説

ツバキの実まるとい。ツブラ（円）である。花が落ち、小さい実がつき、これが大きくなり、熟すとポカンと口を開け、なかから褐色の種子が顔を出す。これをツブアキと呼び、ツバキになった。古代ではツバキの実は重要な産物のひとつだった。古代人もこんなツバキの実に興味を持っていたかもしれない。

以上3つの愚説を提案した。命名の動機ははたして花か、蕾か、果実か？ツバキの語源は、まだほかにも考えられると思う。しかしその際には少々面倒だが、ツバキのキが上代特殊仮名づかいの分類で、甲類であったことを忘れてはならない。

Y・F・C（山溪フラワークラブ）2月号（1991）に掲載



ヤブツバキの果実